

亀、狐、猿の話から

遠藤卓郎

体育科学系教授

「亀が狐を見つけてこの間は兎に勝ったのだから、又競争がしたくなり、『向うの小山のふもとまでどっちが先にかけて着くか競争しよう』といました。狐もこれは面白いとひきうけました。

向うの小山からは小川が流れていました。狐は亀に「亀さんあなたは泳げることに特徴がある。この小川を泳げばもっと早く着くよ」と申しましたので亀もそうだと思い、「ヨーイ、ドン」でさっそく泳ぎはじめました。亀はどんなに遅くても、勤勉に泳げば勝てると思い何時間もせせせと泳ぎました。ところが川の流れの速さより速くは泳げなかったので、もとのところを一生懸命に泳いでいました。亀は自分が一歩も進んでいないなど考えても見ませんでした。

狐は、兎が負けたのはいねむりをしたからだ、いねむりさえしなければ大丈夫と思い、亀が泳ぐのを見ていました。しかし、自分であるいて行くのは面倒くさ

いので、馬でも来ればうまく馬をだまして乗って行こうか、それとも飛行機に化けて飛んでいこうかなど、ねころんで考えてばかりいました。

こうしてとうとう夕暮になってしまい、二匹とももとの所にいたことがわかり競争をやめてしまいました。さて一体どっちが怠けもののでしょうか。………」

いきなりの引用で申し訳ないのですが、これは物理学者、武谷三男の「文化論」(勁草書房、1969年)の中にある寓話の一部です。私の授業では、一般学生に対して体育やスポーツをどう考えて行ったら良いか等について話しています。そのためのきっかけとして2つの寓話を使っています。「亀と狐の話」と「反省する猿の話」です。少しの間、受講生になったつもりになってこの寓話を楽しんでみませんか。授業の様子を少し再現してみましよう。

第1回目の授業です。受講生は1年

生、ほとんどお互いを知りません。多分名前も出身地も考え方も知らないでしょう。知らない者同士が教室に隣同士で座っています。そこでこの寓話を紹介します。そしてこう言います。「さて皆さんはどちらが怠け者だと思いますか？ ちょっと1分間だけ、考えてみてください。」これをご覧いただいているあなたも少し本から目を離して、1分間だけ考えてみませんか。気が向けば何分でも結構です。そして考えがまとまってきたら1分間くらいで、そっと口に出して呟いてみて下さい。授業では実際に相手を決めて話してもらっています。ペアを組み、ジャンケンで先攻と後攻を決めます。そして1分間で自分の考えを相手にスピーチしてもらいます。準備のために1分間の考慮時間があります。学生によってはこれらの1分間が長くも短くも感じられるようです。

相互に言い終わったら3分間のフリーディスカッションタイム、ここでお互いの意見についての感想を述べたり、スピーチをきっかけにして議論を行ったりします。

さて、どうでしょうか！？あなたも自分自身を相手に見立ててスピーチしてみませんか？自分の意見を口に出してみると、不思議にそれについての感想や意見

が欲しくなってきませんか？機会があったらお友達とでもこの問題について話し合ってみて下さい。単純なお話ですが、それだけにその人の考え方や個性が出てきたりします。

授業の時にも、答えや考え方は多様で複雑な様相を呈したりもします。時には議論が白熱してきたりもします。それでも、授業の時の意見分布は（クラスや年度によってかなり違ってきますが）、最近は大体ほぼ3等分されるようです。狐が怠け者だという人が1/3、亀が怠け者だという人が1/3、両方とも怠け者（orでない）という人が1/3です。ちなみに30数年前、尊敬する先輩にこの話を紹介された時、ひどくショックを受けたので、早速、クラスの同輩達に話してみたところ、90%の仲間達が「狐の方が怠け者だ！」と言っていました。時代とともに学生の考え方もまさに移り変わって行くものだと実感せざるを得ません。

さて、この寓話を作った当の武谷さんの考え方はどうなのでしょう。私自身の解釈も少し盛り込んで表にしてみました。

亀は思考の怠慢、実践の勤勉です。狐

	思考	実践	結果
亀	×	○	×
狐	○	×	×
人間	○	○	○

は思考の勤勉、実践の怠慢です。その心は良い結果を出すには、よく考えて、よく実行することが必要だということです。まさに単純明快な解答です。

ところで、スポーツをしている時のあなた、あなたは亀型ですか？それとも狐型ですか？

そうなのです。大切なのは実際の現実場面ではどうなのかということです。実際の体育やスポーツの現場ではどうなのかというと、意外に亀型の人が多いのです。体育教師としての25年の経験からしても断言できますが、圧倒的に亀型が多いのです。頭では「よく考えてよく実践する」と思っているが、実際は亀型というのが現実の姿です。

そればかりではありません。意外に亀形が良いのだと考えている人も結構いるのです。ひたすら実践する！それで良いと考えている人も多いのです。それも一つの立派な考え方には違いありません。良いか悪いかではありません。生活全体を、或いは生きること全体から、考えること実践することをどう位置づけるか、どう考えるかによって変わってきます。意外に深い問題にも関わってくるように思います。

さて、第2話です。今度は反省する猿の話です。机の角に片手をつけて頭を下

に向けて、反省のポーズをとる猿の次郎君を知っている人は多いと思います。次郎君は猿使いの太郎さんと絶妙のコンビネーションで反省のポーズを取り、観客の笑いと拍手を得ています。まさに絶妙のタイミングで反省のポーズを取りますが、実際に反省の思惟を行っているわけでないことは、観客のみんなが承知しています。猿の次郎君にこのポーズをさせているのは明らかに猿使いの太郎さんです。太郎さんが観客からは見えない、或いは気付かれないようにして何らかの合図を送っているのだと思われます。

紙面の都合上、すぐ結論に移りますが、この話の心は、「主体」は誰なのかということです。第1話の枠組みを利用して考えてみましょう。実行する主体は誰か？考える主体は誰か？です。反省する猿の場合、考えているのは猿使いの太郎さんで、実行しているのは次郎君です。次郎君には考える能力もあるし（多分！？）、行動する能力もある。しかし、猿回しの猿には悲しいことに、自分の行動を決定するために考えることは許されていないわけです。

この寓話も単純な話です。しかし、その意味しているところは、決してたやすい問題ではありません。こんな経験はありませんか？熱血先生がうまくできない

自分のために、自分の問題点や欠点を丁寧に分析してくれたこと。その解決のためにはこのようにすれば良いのだと教えてくれたこと。ついには手を取り足を取りながら教えてくれたようなこと。こんなに極端なことはないかもしれませんが、これによく似た光景はしばしば見ることが出来ます。そう体育やスポーツの場面でよく見られる現象です。

この場合、考えている主体は熱血先生です。そして実行している主体は・・・言うまでもありませんね。

もう少し違う形ですが、筆者自身もっと極端な例を経験したことがあります。コーチが大きな声で号令を掛け、その意味も知らされないで、その指示の俣に動かされました。その結果として、自分一人ではとてもできなかったであろう難しい技術を身につけることができました。こうしたやり方は、一見すると何か封建的で好ましくないような感じを受けられるかもしれません。しかし、見方を少し変えてみると、これも有効な方法の一つではあります。もしも良い先生、コーチ、優れた師匠に出会えればとても効率の良い技術の習得方法になります。この場合、考えている（わかっている）のは先生、コーチ、師匠で、実践しているのが生徒、選手、弟子になります。

このような学習法は伝統的な技術伝授に多く用いられているようです。「四の五の言っていないで、まず真似ろ！」と言われて、ひたすらやり続けるという修行に似た練習法等もそれはそれで先人達の知恵の結晶であり、尊重するに値するものもあります。

しかし大学生が、理性の府を卒業した人が、もしこの方法だけに頼っていたとしたらこれは問題です。というのも自分一人で開発しなければならない時には、無力になってしまう恐れがあります。いずれ、一人で立ち向かわねばならない時は必ずやってきます。

その時のために、大学生の諸君には猿回しの猿でもなく、亀でもなく、狐でもなく、人間として自己開発を図れるようになって欲しいと思っています。そして、できれば理性に基づいて自己開発を図れる能力を身につけて欲しいと願っています。それこそが大学生としての自己開発に相応しい、と思うのですがいかが!?

さて最後に、授業では受講生に以下のように聞いてその時間を終わります。今回も読者の皆さんにこう問いかけて筆を置くことにしましょう。

「猿回しの猿にならないためにはどうしたら良いでしょうか？」

(えんどうたくろう ボディー・ワーク論)